沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要（Bull. Mus., Okinawa Pref. Mus. Art Mus.), №7，pp. 95－113，2014

御拝領上布銘入紅型幕の製作時期についての考察

與那嶺一子 1)　平田美奈子 2)

Consideration about the time when the curfains by Bingata clyeing was manufactured

Ichiko YONAMINE1)　Minako HIRATA2)

Ⅰ　はじめに

久米島喜久村家が所蔵する紅型幕２張には「乾隆二十二年丁丑拝領之上布　公孫氏」の銘が染められており、琉球王国時代の18世紀の半ばにおける紅型技法を知る重要な作例である。また、紅型について、この幕以前と考えられる明確な作例は残っておらず、琉球における紅型技法の議論において、欠かすことのできない存在といえる。

同幕については、1980年、渡名喜明が『沖縄県立博物館紀要第６号』にて紹介し、製作年を1759年と定め論述している（註１）。しかし、製作時期については、当初から、異論がある。２張の幕の文様の内容は同じだが、文様、配色（色差し）に若干の違いがみられることから、藤村玲子は、１張は1759年に製作されたが、もう１張は明治期に模造製作されたものではないかと考察している（註２）。

また、喜久村家はこの２張以外にも別の２張の幕を所蔵しており、御拝領上布による幕と同時期の製作なのか、異なるのか、その辺りも含め、この４張の幕の詳細を比較し、製作時期について考察してみることにした。

喜久村家が所蔵する幕４張については、資料名称が定められておらず、今回まとめるにあたり、下記の名称で論述することにした。

１　御拝領上布銘入紅型幕①（以下に「御拝領上布幕①」又は「上布幕①」と記す／写真１）
２　御拝領上布銘入紅型幕②（以下に「御拝領上布幕②」又は「上布幕②」と記す／写真２）
３　鶴に波文藍型幕（以下に「鶴に波文幕」と記す／写真３）
４　椿梅笹輪宝文紅型幕（以下に「椿輪宝文幕」と記す／写真４）

なお、御拝領上布幕２張は久米島博物館に、鶴に波文幕、椿輪宝文幕の２張は、沖縄県立博物館・美術館に寄託されている。

紅型は型染と筒描きの二つの技法があり、さらにこれらの技法は多色で染める紅型と藍のみで染める藍型に分類されることがある。「筒描き」は筒口から防染糊を絞り出して模様を描き、色を差す技法のことである。「ヌイヒチ（糊引き）」「ツツビキ（筒引・筒引き）」「ツツガキ（筒描き）」と、いくつかの呼称があるが、今回は1980年の渡名喜の論文で使われた「筒描き」で示すこととする（註３）。

Ⅱ　上布拝領の経緯について

幕４張を所蔵する喜久村家（屋号：上比嘉殿内）は久米島町宇根にあり、屋敷内には沖縄県指定天然記念物「宇根の大ソテツ」が残る。琉球王国時代には久米島の地方役人を務める家柄であり、「公孫氏」の氏姓を名乗る。

1756（乾隆二十一）年、尚穆王の冊封使を乗せた船が久米島沖で遭難し、その救助の功績により、五世絜卿は座敷の位階を、六世絜聡は掛け物一幅、上布二疋、絜聡の実父絜賢も掛け物一幅、上布一疋、座敷の位階を王府より拝領している。御拝領上布幕に記された「乾隆二十二年丁丑拝領之上布　公孫氏」は、王府からの褒賞を記念したという意味となる。

この他に絜聡は冊封正使全魁より「福」の字、副

1) 沖縄県立博物館・美術館　〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan
2) 沖縄県立芸術大学（共同研究員）〒903-0815 沖縄県那覇市首里金城町 3-6
Okinawa Prefectural University of Arts , 3-6, ShuriKinjou-Cho, Naha, Okinawa, 903-0815 Japan

使周煌より孫億の「牡丹図」一幅他を頂戴している。

この大きな功績により、公孫氏は家譜の編纂が許され、1759（乾隆二十四）年、絜聡は首里に滞在する。その際に、自らの肖像画を描かせ、御拝領した上布を紅型幕に仕立てたと推定されている。この辺りについては、渡名喜の論考（註1）及び平川信幸「紙本着色　喜久村絜聡（片目地頭代）画像　－その成立をめぐる背景－」『久米島博物館紀要第13号』に詳しく述べられており、それを参照されたい（註4）。

Ⅲ　18世紀における琉球の体制及び染織について

幕が染められたとされる18世紀の琉球はどのような状況下にあったのだろうか。

1609年、琉球王国は薩摩の侵攻を受け、その後、中国との冊封関係を維持しながら、大和（徳川将軍）の影響下に置かれるという大きな転換期を迎えた。18世紀に入るとその体制に落ち着きがみられ、国史の編纂事業、教育、農政、河川の改修事業、産業の活性化が図られる。特に尚敬（第二尚氏13代／在位1713～51）の代は近世琉球の最も充実した時期と言われる。しかし、その後は、災害による疲弊、中国や大和との交流による国庫支出が増加し、18世紀の終わりには、王国の財政に翳りがみえてくる（註5）。

染織においては、17世紀に木綿の栽培が伝わり、養蚕技術が改良され、税として上布、紬、木綿、芭蕉布が代納される仕組みが整うことになる（註6）。特に、宮古、八重山の上布、久米島の紬は、幕末になると、薩摩を経由して大阪、江戸庶民に流行る衣類の一つとなる（註7）。

では、紅型はどうだったか、それについては渡名喜の論文（註1）に詳しいので割愛するが、この御拝上布領幕①②の発見によって、当時すでに、型染、筒描きという紅型の技法があったと判断されている。

紅型の発生については、諸説あり、未だ結論に至っていないが、長崎巖は型染技法と意匠の観点から、18世紀の半ばではないかと類推し、紅型に影響した染織として、大和の唐織とともに17世紀に誕生した友禅をあげている（註8）。また、紅型の染賃について記した『納殿染賃例』『散形付并似例』（1793年／（註9））にも、江戸期以降に発生した色名「よしおか」「柿色」などが記されており、友禅などの大和の染織物が、文様だけでなく、色からも影響していたことは明らかである。このように、紅型の発生については、新たな見解も出ている。

この他に18世紀当時、紅型の先駆的な染物として、蒟蒻による接着糊で金箔や銀箔、顔料で文様を表す「浦添型」や、布帛に直接文様を描く描き絵も、存在していた（註10）。

さらに、琉球で製作された繍や絞による作例（註11）も残っており、琉球における18世紀は、政治だけなく、染織文化の面からも、それまでの染織技法に加え、新たな素材や技法を受け入れ、国内での展開を試みていた時代といえる。

Ⅳ　調査方法及び考察

喜久村家の幕４張を下記の項目で調査した。比較参考のために、沖縄県立博物館・美術館所蔵の幕３張及び幕裂１枚についても同様の項目で調査をした。

1〔素材〕
布を構成する糸の績み方や撚糸の具合から、繊維を同定する。

2〔密度〕
１㎝間の経糸、緯糸の本数を調べ、織りの密度を計測し、布の粗密をみる。

3〔布幅〕単位は㎝
布は伸縮しているので、布の中心に近い部分の織幅を計測する。

4〔寸法及び反物の長さ〕単位は㎝
幕全体及び仕立ての状況を採寸し、形状を作図する。また、幕を仕立てるために必要な布の長さを割り出す。

5〔縫い方・仕立て方〕
幕の縫い目から仕立ての順序を考察する。

6〔文様及び構成〕
個々の文様及び構成を調査する。

7〔染色技法・工程〕
染色技法を確認する。さらに幕の表裏、縫い代の染色の様子を調査し染色工程を推測する。

8〔彩色・配色〕
地色及び差し色を DIC カラーガイド（「日本の伝統色」大日本インキ化学工業（株））で採取する。色は褪色があるため、あくまでも共通理解するための参考である。
模様の配色を調査する。

9〔保存状況〕

幕の現状を確認する。

調査の結果は、喜久村家の幕４張のみ別表１にまとめた。考察は下記のとおりである。他の幕の報告は、後日、機会を設けたい。

１　素材

素材は４張とも、縒りつなぎで糸が績まれ、経糸には撚糸された様子がみられ、これまで筆者が確認してきた琉球産の苧麻織物の特徴と変わりないことが確認できた（写真１-７，２-７，３-６，４-６）。

２　織密度

織の密度は、御拝領上布幕２張とも経18～16本・緯13～12本で、ほぼ同素材と思われる。

鶴に波文幕は経14～15本、緯13～12本、椿輪宝文幕は経15～16本、緯11本である。

明治～昭和初期にかけて染められた苧麻製の紅型幕の織の密度は経16～12本、緯11～７本であり（別表２）、御拝領上布幕は、幕の素材としては上質である。

王国時代、宮古や八重山に課せられた布は、粗密によって上布、中布、下布に分かれていた(註12)。下布はカナイヌヌと呼ばれ、筒描きの風呂敷や幕の素材とされる例がよくみられる。当館及び日本民藝館の所蔵品で筆者が調査した苧麻による織物のうち、御用布と呼ばれていた上布やそれに類する絣織物の織り密度は経24～32本で、当館所蔵の風呂敷の基布のうち、下布と思われる密度は経10～12本である(註13)。この事からも御拝領上布幕は幕や風呂敷によく使われる下布ではなく、中布クラスの布であることがわかる。少し荒めだが、衣服として使うことも可能であり、その意味も含めて絜聡が「上布」と示したのではないかとの考えもあるが、『冠船躍方日記』（1838年／(註14)）に冊封使歓待の舞台に紺屋の知念家が「上布紺染ニ而のしめ弐筋の幕」を染めたとあり、衣服だけでなく幕に使われる苧麻織物も「上布」と呼ばれていたようである。

３　布幅

御拝領上布幕①の布幅は47㎝、御拝領上布幕②は46㎝、波に鶴文幕は51～52㎝、椿輪宝文幕は49.5㎝であった。

別表２でも分かるように、紅型幕に使われる布巾は37㎝～53㎝まで様々である。王国時代に定められていた御用布の幅は一尺三寸から一尺七寸まであり(註15)、一尺七寸を約51.5㎝（一尺30.3㎝、一寸3.03㎝として類推する）とすると鶴に波文幕がその幅に当たる。他の幕はこれより小さく、４張の幕の基布は琉球で織ることが可能な苧麻織物であることが分かる。

４　寸法及び反物の長さ

御拝領上布幕①②は布の長さに違いがあるが、布幅はほぼ同寸である。仕立てた形状も同じであり、ほぼ同寸とみてよい。波に鶴文幕の形状は御拝領上布幕より若干小さい。さらに椿輪宝文は長さ、幅ともに御拝領上布幕の半分の大きさである。

反物としての布の長さは、縦寸法に上下の縫い代分を足した長さに接ぎ数をかけて割り出してみた。御拝領上布幕①は1,521.6㎝、御拝領上布幕②は1,532㎝となる。鶴に波文幕は約1,104㎝、椿輪宝文幕は約535㎝であった。

絜聡が拝領した上布は二疋とある。王国時代の反・疋の長さは布の幅によっても異なるため、簡単に疋の長さを割り出すのは難しいが、一疋を十一尋と考えた場合(註16)、一疋の長さは五丈五尺で約1,660㎝となる。絜聡が拝領した二疋は、幕２張を仕立てるに充分な長さである。また、他の２張（波に鶴文幕・椿輪宝文幕）は布幅、織り密度が異なるため、御拝領時ではなく、別に入手したものと思われるが、時期は定かではない。

５　縫い方・仕立て方

鶴に波文幕は、６枚の布を接ぎ合わせているが、左端の布の真ん中をつまみ縫いし７枚接ぎのように見せかけている(図３)。偶数を嫌いわざわざ奇数としたのか、その意図については不明。御拝領上布幕の２張は偶数（８枚接ぎ）、椿輪宝文幕は奇数（５枚接ぎ)である。参考までに当館が所蔵する紅型幕は、２枚を横に接ぎ合わせたもの(№349)、12枚接ぎ(№403)、18枚接ぎ（№406）である。

４件とも、縫い方は並み縫い（「ぐしぬい」とも言う)。御拝領上布幕２張は縦を縫い合わせた後で上部と裾を三つ折り並み縫いしているが(図１-３，２-３)、波に鶴文幕と椿輪宝文幕は上部と裾を先に三つ折後並み縫いし、最後に縦を接ぎ合わせている

（図３- 3, ４- 4)。また、椿輪宝文幕は、他幕に比較すると長さも幅も短く、上部に絹布（絹布は輪状に折り返され二重になっている）が被さるように縫いつけられている(図４)。絹布は平織で中国産と思われる。このような上部に別布を被せて仕立てる紅型幕は他に例がない。

紐通しの作りは、御拝領上布幕２張は同じで、幕に縫いつけた部分に補強のステッチがみられた（図１- 2, ２- 2)。鶴に波文幕の紐通しには補強の様子はみられない（図３- 2)。椿輪宝文幕の紐通しは白布（木綿）と紺布（苧麻）で二重に仕立てられている（図４- 3)。

椿輪宝文幕の左端１枚は、縫製の順序が他の４枚とは異なり(図４- 5)、また縫い糸も違うものが使われている点や、輪宝文も極端にずれている事から、縫い直しがあったものと考えられる。本来、右端に接ぎ合わせられていたものが、解けた際に左端に縫いつけられたのではないかと思われる。

６　文様及び構成

（１）御拝領上布幕２張

これらの幕は上部中部下部と３段階に分け文様構成されている。

上部には太さの異なる２本の白い線で熨斗目文が表わされている。中部には４羽の鶴文が左右に向きを変え、横一列等間隔に置かれ、幕裾の下部には波文・渦文・波頭文・飛沫文と海を表現した文様が置かれている。更に幕の右端には縦書きで、この御拝領上布幕①②の特徴である銘文が染められている。しかし、御拝領上布幕②は「拝」の右のつくりの一画が欠落し、横棒線が三本の変形文字となっている。

鶴文は背羽、風切羽、大雨覆、小雨覆、尾羽、上尾筒が描き分けられており、参考となる何らかの手本があったと思われる[註17]。

鶴文の染地型紙は２枚で、型紙を表裏（左右）に反転させ、配置を変えて染められている。御拝領上布幕①②における鶴文の構成をみると、御拝領上布幕①の右端の鶴文は御拝領上布幕②では反転し左端に配置されている。上布幕①の右２は上布幕②の左２へ、上布幕①の右３は、上布幕②の左３へ、上布幕①の左端は上布幕②の右端に使われている。

波頭文は、波に鶴文幕の飛沫をあげた力強い描線と御拝領上布幕①②を比較すると、上布幕①②の方がシンプルにデザイン化されている様子がうかがえる。

（２）鶴に波文幕

この幕は御拝領上布幕と同モチーフを使用し、ほぼ同じ文様構成である。上部と下部は同じモチーフで描かれているが、中部の鶴文は幕の幅が短くなっている為か数も３羽と少ない。しかし中央の鶴を中心に、両脇の鶴を向い合う形で左右対称に置くことで調和がとられている。

鶴に波文幕は、御拝領上布幕①、②と比較すると渦文が多く表現されており、また、御拝領上布幕２張にはない波文が描かれている（写真３- 1)。

（３）椿輪宝文幕

この幕は上部と下部で文様構成されている。上部には椿の樹木に梅と雪持ち笹が構成された文様が等間隔で５枚接ぎの布の各中央に並列し、下部となる幕裾には、幾何学的にデザインされた大柄の輪宝文が帯状に付けられている。二つの模様はすべて型紙によって型置きされている。

このような配置・構成は一般的に紹介されている紅型幕には見られない特徴であり、また密教法具の一つを文様化した「輪宝文」と神聖な樹として好まれた「椿文」も紅型幕には使用されない題材である（別表２)。「輪宝文」と「椿文」の二つの文様には、神聖なものという点で繋がりはあるが、紅型は季節や風習などの形式に囚われることなく様々な文様を一つの画面に染め表すことが多くみられ、この文様を使用した深い意図があったかどうかは不明である。

また、文様や構成に加え、幕の上部に絹の飾布が付いた形態なども特徴的であり、この椿輪宝文幕がどのような場面で使用されたのか、これも大きな課題である。

７　染色技法・工程

幕などを染める基本的な染色の工程は下記のとおりである[註18･19]。

工程１　布を接ぎ合わせ或いは並べ、墨又は消炭で下絵を描く[註19]。

工程２　作業しやすいサイズで数分割し筒描きを

行う[註18]。この際に、熨斗目文は幅を表す線のみ描き、模様の中は糊を入れない。

工程３　色差し・隈どりを行う。

工程４　地染めの前に、色差した文様、熨斗目文の中などを糊伏せし地染の準備をする。その際、藍色の影響を受けたくない黄色や赤、ピンクなどの明るい色には生地裏にも糊伏せを行う。

工程５　藍で地染する。希望する色になるまで、乾燥（発色）、地染を繰り返す。
※地染めは基本的に浸染される[註18･19]。

工程６　最後に水元をおこなう。

幕は数枚の布を接ぎ仕立てられている。布は各工程（工程１・２・３・４）で縫い繋いだり解かれたりする。どのように縫い繋いだか、その答えは染められた幕の縫い代に、その痕跡が残っており、そこを調査することは製作の流れを知る重要な手がかりの一つとなる。

各工程で残された跡を下記の三つの観点で確認し、製作工程を推察した。

①文様を表す筒描きの線
②色差しの顔料（文様の配色）
③文様を糊伏せした跡

（１）御拝領上布幕２張

御拝領上布幕２張の最大の特徴は、「型染」「筒描き」の二種類の紅型技法を使用している点にある。我々がこれまで目にしてきた紅型幕は、風呂敷（ウチクイ）や舞台幕などの大物を染める時に用いられる筒描き技法で文様を布に付けていく。しかしこの幕には衣裳に使用される型紙で鶴文が付けられ、その他の熨斗目・波頭・飛沫・波の渦・銘は筒描きにより、「型染」と「筒描き」を併用した作りとなっている。このような併用事例は、筒描きの風呂敷にもみられ、中心部の丸文に型紙が使われることがある。

これらの幕は、まず布を接ぎ合わせ墨で下絵が描かれている。次に布を２枚ずつに解き、鶴文の型紙で糊を置く。上部の熨斗目文、裾の波文は、先に糊置きの終わった１枚目を解き、２枚目と３・４枚目を接ぎあわせ、文様を合わせながら、糊置きする。このような作業を繰り返し、最後、１枚ずつになった布に色差し、隈取りが行われている。地染めの前に鶴文様や波文の水色に表側から糊伏せをする。布裏からは糊付けされていない。地染は藍の浸染と思われるが、布目を拡大してみると、糸の重なりに染まっていない部分が確認され、表、裏両面からの藍の引き染めの可能性も考えられる。

鶴文は染地型紙を使用している。染地型紙は模様の輪郭を細い線で囲むようにして彫り落とし形を表し、一度の糊置きで地染めまで終えるもので、糊跡の線は、筒描きと同じ効果を生む。輪郭線で模様を囲む表現は白地型紙では出せない。

（２）鶴に波文幕

鶴に波文幕も布を縫いつないで下絵が描かれている。下絵の薄い墨跡が残っていた。次に布を２枚ずつに解き、鶴文を筒描きし、御拝領上布幕と同様の手順で熨斗目文、波文を筒描きする。１枚ずつに解かれた布に水色を染め、そこと熨斗目文に糊伏せを行い地染めして濃い藍に染め上げている。地染めは御拝領上布幕と同様に藍の浸染と思われるが、糸の重なりに染まっていない部分が見られる。熨斗目・鶴・波・波頭・飛沫・波の渦の文様は全て筒描きによる。

（３）椿輪宝文幕

椿輪宝文幕は、椿梅笹文（白地型）と輪宝文（染地型）の型紙２枚を使用した型染である。椿文は一枚の布の中央に型置きされ、独立している。それに対して、輪宝文は横向きで連続的に文様が置かれており、幕に仕立てた時に幕の裏に縫い込まれた分だけ柄が隠れ、文様がずれてみえる状態となっている。その点から、布を仮縫いせず５枚並べた状態で型置きをしていることが分かった。

椿輪宝文幕の上部に使用される椿梅笹文の型紙は大変特徴的な型紙である。一見、御拝領上布幕の鶴文と同じ染地型紙にも見えるが、この型紙は文様を残し、地を彫り落とす白地型紙の形式を変えた作りで、白地型紙の糸掛け前の吊りを残した状態である。藍による地染めを意識して、白地型紙を変形した型紙を使用したと思われる。

また、椿梅笹文（白地型）と輪宝文（染地型）の型紙には技術的な差異がみられ、この２枚の型紙は全く別人の作ではないかと思われる程である。この点もこの幕の特徴である。

8　彩色・配色

DIC カラーガイド（「日本の伝統色」）による色の確認結果は別表１のとおりである。番号はカラーガイドの№である。

色は藍系統、黒灰系統、赤系統（黒味がかった赤茶から黄味がかったものまである）がみられ、御拝領上布幕①②に特に大きな相違点はみられない。色の配合は各幕に違いがあり、それについては後述する。

御拝領上布幕②にみられるは煉瓦色が、御拝領上布幕①にはみられない。退色によるものか、色差しで意図して行ったものか不明。

他２件の幕の色合いも、御拝領幕と同じ。水色は浅葱色、露草色の違いが出たが、殆ど違いはない。灰色は藍の変色の可能性もあるが、その点も含め科学的な分析を待たねばならない。特徴的な茶色は小豆色であった。紅型の代名詞のような鮮やかな黄色や紫～桃色にかけての色、緑色が見られないが、退色によるものか、当時の配色の特徴なのか不明である。

18世紀の染材は、『散形付并似例』（1793年／(註9)）によると下記のとおりで、参考までに記しておく。

赤：正延紫・唐朱・丹朱
黄：石黄・黄土・槐花
青：和藍浪
黒：加治木墨・五倍子・皁凡
白：水粉

（１）御拝領上布幕２張

御拝領上布幕２張は使用頻度の影響と思われる保存状態の差が、布の破損だけでなく退色にも表れていた。しかしその点を考慮してみても幕全体での色彩による大きな違いは感じられなかった。

その印象はカラーガイドでも分かるように、同じ色材によって配色が作られ共通している。

更に個別にみていくと、色の配合の違いや基本的な染めを終えた後に技法を加え、それぞれの幕の配色に微妙な変化をもたらした跡が下記のとおりうかがえた。

●鶴文の色材は共通しているが、上布幕②の鶴には朱を基調に黒を加え赤系統の色が作られている。

●上布幕①では「墨による線描き」が、上布幕②では「墨の隈取り」が配色後に施されており、どちらも一方の幕のみに異なる技法で染められている。

つまり、これから推測すると、まったく同じ幕を製作したのではなく、同柄でありながら意図的に配色や技法を違え変化をもたせて異なる２張の幕を製作したように思われる。

さらに２張の幕を比較すると、染色技術の差が下記の２点において見えてきた。

●鶴文の染地型紙を糊置きした時に、糊が型紙下に入り込み文様が潰れてしまっている個所がある。これは、２張に共通する。
上布幕②の鶴文からは、口ばしや羽先に地色の藍によって消された模様の跡が確認できた。２張の幕の糊置き技術の差は防染糊の状態が異なるものを使用したか、あるいは職人の手が変わったことによるものと考えられる。

●筒で糊引きした線の揺らぎが目立つことである。波文を描く線は波の下描きを捉えておらず、波文の形と下絵の線がかみ合っていない部分がみられる。その結果、上布幕②には地染め後、手描きによる修正が加えられ形を整えられていた。

その他、現在の紅型では行われない灰色の配色に朱色の隈取りの組み合わせなど、共通した特徴が見られた。

このように２張の幕からは、配色での相違点と技術面での差が確認できたことを踏まえまとめると、御拝領上布幕①②は同じ紺屋でほぼ同時期に異なる職人の手により製作したと考える。

（２）鶴に波文幕

波に鶴文幕は、筒描き技法のみで文様が付けられており、配色は藍型（藍濃淡染め）で仕上げている。筒描きのもつ躍動感のある線ですべての文様が描かれており、型紙で細部まで表現した鶴文が並ぶ御拝領上布幕①②の構成とは趣が異なり、更に藍の濃淡のみで配色したことで印象に残る存在感のある幕に仕上がっている。

（３）椿輪宝文幕

カラーガイドで採取された色は、地色が少し黒味を帯びている点以外は、若干の違いがあるものの、御拝領上布幕とほぼ同じである。地色は最初に墨で

染め二度目に藍が染められており、黒呉汁を引いた後の藍染ではないかと思われる（註19）。

梅の黄味がかった花弁の先に鮮やかな赤が重ねて染められており、隈取りの初期段階のように思える（写真４-３）。

９　保存状況

御拝領上布幕①より御拝領上布幕②に破損がみられるが、御拝領上布幕②は紐通しが全て残っており、御拝領上布幕①は紐通しが４カ所しか残っていない。御拝領上布幕①は紐通しが破損した段階から殆ど使用されなかったのではないかと思われる。

鶴に波文幕は破損著しく、紐通しの残りも２カ所である。

椿輪宝文幕の左端は他の箇所と縫い糸も異なり、縫い直されていることがわかる。

いずれの幕も破損箇所があり、補修を行いながら使用し続けていた様子がうかがえる。

Ⅴ　まとめ－御拝領上布幕の製作年について

御拝領上布幕二張に記された「乾隆二十二年丁丑拝領之上布　公孫氏」の意味は、王府から上布を拝領した六世絜聡が名誉あるこの功績を記念し、子々孫々に伝えるということである。ここで問題となるのは、製作年と、なぜ２張染めたのか、という点である。

１　素材から

御拝領上布幕２張は苧麻の素材としては同素材であり、前述したように、1757年に拝領した「上布」に間違いないものと思われる。銘をわざわざ幕に記す意味は、この布が「御拝領之上布」であることを示すためであり、それから考えても、染められた幕は拝領した「上布」でなければならない。また、一疋で幕１張を作成することは可能である（「寸法及び反物の長さ」にて考察した）。

製作年が異なるかどうか、という点であるが、御拝領した上布１張を先に染め、もう１張をそのままの状態で100年近く保管していたとは考えにくく、絜聡の時代に拝領した上布二疋を２張の幕にしたのではないかと思われる。

●色と文様から

カラーガイドで採取した色を比較すると、御拝領上布幕２張と椿輪宝文幕１張は殆ど同じ色（色材）が使われていることがわかる。

また、型染による鶴文様４羽は同じ型紙２枚を使い、御拝領上布幕①②に糊置きされており、色と文様から同一工房にて染められたことがわかる。

この２張には次の違いもみられる。

１　御拝領上布幕②は拝領の「拝」の字が一画少ない。

２　筒描きの線の勢いが幕２張で異なる。

３　色差しの色や隈取りの方法が異なる。

これらの違いから、染めた人物が異なることが考えられる。

鶴文様は、喜久村家以外の幕にも表現されている。当館所蔵の幕（近世末から近代にかけて製作された）に表現される鶴文と比較し、鶴の描写という観点からみると、羽の付き方、脚の位置などが崩れ、パターン化していく傾向にある。鶴と波を表現した幕３張を比較すると、鶴に波文幕に表現される筒描きによる鶴は、羽の位置はずれているが、骨格的には御拝領上布幕より実際の鶴に近い表現がなされている（註20）。また、波文様は鶴に波文幕の方が線に勢いがあり、同じ筒描きによる表現だが、御拝領上布幕２張は波文様もパターン化している様子がうかがえる。

●染色技法から

４張の幕の地染めは、藍による浸染と思われるが、上布幕①②と鶴に波文幕は経糸と緯糸の重なり部分が染まっておらず、引き染めの可能性も否定できないが、他の作例との比較や染色実験による考察がされていないため、浸染か引き染めかの結論は次の機会を待ちたい。椿輪宝文幕は、他の幕に比較すると黒味がかっており、糸の重なり部分は薄く染まっている様子がうかがえる。墨を混ぜた呉汁を先に引いた影響かどうか今の所不明である。

1793年の『散形付并似例』（註９）には藍系統の染材として「和藍浪」と記されており、18世紀の衣服を染色する場合は、藍蝋を溶いて両面から引き染めした使用した可能性が高い。大正、昭和初期には藍甕に浸して地染めしており（註18･19）。19世紀から20世紀にかけて藍の普及に伴い、染色方法が引き染めから浸し染めへと変わったのではないかと推測される。

３張の筒描きの線を比べてみると、職人の技量の差が明らかである。

御拝領上布幕の鶴文や椿輪宝文幕の輪宝文の型染も型紙下から糊がはみ出している様子がみられる。また色差しや隈取りにおいても、18～19世紀の作とされる尚家の紅型作例と比較すると技法としてまだ完成しておらず、染物として発展途中という様子は否めない。幕３張の糊置きや色差しにみられる技術の差は、紅型の初期の様相と思われる。この点からも、これらの幕は、王国末期から近代にかけて紅型が技術的に高まった頃（19～20世紀初期）の作とは思えない。

鶴文の染地型紙、椿梅笹文の白地型紙、輪宝文の染地型紙をみると、型紙の精度に差がみられ、紅型に関係する工房にも、職人個々の技量に差があったことは明らかである。

●幕の用途から

幕が、製作時どのような用途を持っていたかという事は、推測の域をでないが、少なくとも、葬式幕としての利用があったことは確かである。渡名喜が1980年当時、喜久村絜輝氏から話を聞いており(註１)、筆者（與那嶺）も1996年に喜久村絜弘氏から同様のことをうかがっている。藤村は「祝い幕」であった可能性を解説で触れており、このような異なる見解がある(註２)。

かつての暮らしのなかで、非日常（ハレ）は慶事だけでなく弔事も含まれており、それからすると、幕は慶弔両用であったと考えることができるのではないか。

葬式の幕は「ウリー・マーク」「ダビカチャ」「ウームンガチャ」「ダビマーク」などと呼ばれ、戦後も沖縄県内の一部の地域では、通夜の晩に、死者を守るために使われていた(註21)。伊平屋村田名の事例を除き、通夜をしない場合は使用しない物であった。幕の代わりに蚊帳が使われた例もある。また、網を死者に被せる所もある(註21)。

使用方法は①四隅を張る　②四隅を張るが縫い目を五寸程解く　③三隅を吊る　④蚊帳の二隅を幕のようにつるなど使用方法はさまざまである(註21)。

渡名喜は「葬儀の際死者を寝かせた部屋を囲むのに用いたという」と述べているが、部屋ではなく、死者を囲むように張っていた可能性もあり、それであれば、１張で幕としての用を達成することができる。また御拝領上布幕は近隣へも貸出されており、喜久村家の私的な所蔵品であるが、公共の幕としての役割もあった。御拝領上布幕②が退色していたのは、この幕を貸出用とし、「拝領」の文字が正しい御拝領上布幕①を喜久村家用としていたとも考えられる。また、御拝領上布幕①の紐通しが破損したため、紐通しの残っていた幕②を頻繁に使用したため、幕②が退色したとも考えられる。

このような点から、幕２張は1759年に同一工房で違う職人グループによって染められたものと判断した。

何故、２張染めさせたかについて、御拝領上布幕②の銘「拝領」の文字が一画欠落したものに仕上がっていたため、再度正字の「拝領」を染めさせたとも考えられるが、確証となる根拠は探せない。上布を御拝領することは名誉であり、拝領した二疋を子々孫々まで残すために絜聡が考え出した答えが２張染めて残すことだったのではないか。

琉球王国における18世紀は、染織に関する様々な技法を取り入れた時期であり、紅型もそれまでの染色技法に代わる活気的な多色染めとしてこの頃に登場し普及していったと考えられる(註８)。

これまで、紅型作例の製作時期を定めるのは困難であった。王国時代の作例が少なく、紅型作例を補足する史料も少ないためである。

喜久村家の御拝領上布幕２張は紅型の初期の姿を技術的に実証する貴重な基準作例であり、今後、尚家に残る紅型に関する文書『納殿染賃例』や『散形付并似例』(共に1793年）との照合や日本の染色技法との比較、現存する他の紅型作例の科学的な分析比較などにより紅型研究が深まり、また紅型の変遷が明らかになるものと思われる。

今回の調査で紅型に関する課題がいくつか確認できたので記しておく。

幕の縫い代を調査することで、染めの工程を推定できることがわかった。

幕ごとに使用する布は糊置き、色差し（配色）、地染の工程で接ぎ合わせたり、解いたりを繰り返しているが、解かれる枚数は一定しておらず、必ずしも

同じ枚数で分けて作業をしているとは限らないこともみえてきた。

布を分割する布の枚数は工房の大きさに関係するものと思われるが、次の課題である。

また、何故紅型の衣裳が型染なのか、多くの人が疑問とする点について、本稿の考察の過程でヒントを得た。筒描きは職人の技量が明らかに作品に反映するが、型染めであれば、一定の質を確保することが可能である。文様をあるパターンで繰り返す織物を模した衣服においては、型染が発展したのではないかと考えられるが、この考察も次の機会としたい。

これまで、この作品についていくつかの報告がなされてきた。現在はデジタルの時代となり拡大写真撮影が素人でも簡単に行え、また得られた情報を多くの人と共有しながら確認することが可能となり、以前とは格段に調査研究が深まっていると言える。視覚と記憶という少ない情報を頼りにこの作品についてまとめられた先達の努力には敬意を表したい。

最後に、御拝領上布幕の調査にあたっては所蔵者の喜久村等氏及び久米島博物館の宮良みゆき氏には何度も資料閲覧の機会を与えていただき感謝申し上げる。

なお、御拝領上布幕の布素材の拡大写真は沖縄県立芸術大学の柳悦州教授より提供いただいた。

註

1）p1-11　渡名喜明「久米島喜久村家所蔵の紅型幕について」『沖縄県立博物館紀要　第６号』1980年

2）p155　藤村玲子「46　深浅地鶴に波文幕」「47　深浅地鶴に波文幕」『沖縄美術全集３　染織』沖縄タイムス社　1989年

3）紅型の用語について

「ぬいひち（糊引き）」

＊芹澤銈介「「かたちき」と「ぬいひち」」『工藝　100号』日本民藝協會　1939年

＊「糊引き（ヌイビチ）」は那覇で使われた用語で、本来の紅型用語ではないと城間榮喜氏が述べている（渡名喜「筒描きの紅型」『筒描染』泰流社　1977年）。

「筒引・筒引き」

沖縄県指定無形文化財「びん型」（昭和48年指定）は「2. 製法は（２）型染であること（筒引を含む）」と要件が示されている。

伝統的工芸品「琉球びんがた」（昭和59年指定）は「③「筒引き」には、布製の糊袋を用いること」「⑦防染は、型付け、「筒引き」又は「糊伏せ」によること」と指定条件が付されている。

「筒描き」

鎌倉芳太郎、渡名喜明の両氏が『筒描染』（泰流社　1977年）で、「筒描き」の用語を使用している。鎌倉は「筒引」も併用しながら論考している。

1987年に行われた沖縄県内諸職関係民俗文化財調査の報告書『沖縄県の諸職』(沖縄県教育委員会　1988年）では、城間榮喜・知念積弘両氏からの聞き取りは「筒描き」でまとめられている。

4）p55-73平川信幸「紙本着色　喜久村絜聡（片目地頭代）画像　－その成立をめぐる背景－」『久米島博物館紀要第13号』久米島博物館2013年

5）●『沖縄大百科事典　中巻』沖縄タイムス社1983年

p410　尚益（在位1710～12）

p415　尚敬（在位1713～51）

p436　尚穆（在位1752～94）

p410-411　尚温（在位1795～1802）

●『琉球歴史・文化史総合年表』琉球文化社　1973年

6）琉球における布を税として納める制度は近世以前からあるが、1600年代以降に強化され、下記のように「公事帳」などの御用布製作指導マニュアルが整えられ、システム化してゆく。

『八重山年来記』「御用布の手形…」（1673年）

『参遣状』「毎年の御用布の内…」（1690年）

『久米島仲里間切公事帳』（1735年）

『久米島仲里間切公事帳』（1831年）

『宮古嶋御用布座公事帳』（1850年カ）

『冨川親方八重山嶋御用布座公事帳』（1850年カ）

『翁長親方八重山嶋規模帳』（1857年）

7）●喜田川守貞著・宇佐美英機校訂『近世風俗誌（守貞謾稿）二・三』岩波書店1999年（※1837～1867に編集）

●寺島良安『和漢三才図会』（1712年に出版）

8）長崎巌「琉球紅型の技法及び意匠の発生に関する－試論－型染紅型を中心に－」『国際服飾学会誌　№42』国際服飾学会　2012年

9）●宮里正子「納殿染賃例」『那覇市歴史博物館紀要　第１号』那覇市歴史博物館　2009年

●與那嶺・小野・山田「資料紹介　琉球国王尚家関係資料より『散形付并似例』」『沖縄県立博物館・美術館紀

要　第６号』沖縄県立博物館・美術館　2013年

10）p5-7　岡村吉右衛門『琉球古紅型　上』有秀堂　1967年
p1-3　鎌倉芳太郎『古琉球型紙』

11）〈繍〉
伊平屋あむがなしの衣裳裂（伊是名村教育委員会）
芭蕉紺地布（伊是名村教育委員会）
苧麻紺地布（伊是名村教育委員会）
絹草花文様繍大袖衣裳（個人蔵）
裂〈繻子地鳳凰文〉（個人蔵）
裂〈繻子地獅子文〉（個人蔵）
絹薄茶地綾織神衣装（個人蔵）
ドギン（東京国立博物館蔵）
〈絞り〉
絞染裂（個人蔵）

12）P72「冨川親方八重山嶋御用布座公事帳」『沖縄県史料　前近代７　首里王府仕置３』沖縄県教育委員会 1991年
P72 宮城文『八重山生活誌』1972年

13）●新垣幸子氏（沖縄県指定無形文化財「八重山上布」保持者）より１㎝間経10本を下布とうかがう（2011年）
●当館所蔵の風呂敷の苧麻素材は経10～12本が最も多く、35作品中26例である。（「資料紹介：染織資料Ｖ－風呂敷（包み物・掛け物・被り物）－」『沖縄県立博物館・美術館、博物館紀要　第４号』2011年
●当館及び日本民藝館所蔵の苧麻による作例から上布の密度は１㎝間経26～32本と言える。
１　八重山上布絣スディナ（№1312）…… 経28本
２　八重山上布絣（SE062）…… 経30本
３　苧麻花染クジリ格子（や－55）…… 経26本
４　苧麻浅地クジリ格子（や－255）…… 経28本
５　苧麻白地クジリ格子（や－５）…… 経28本
６　苧麻黄地クジリ格子（や－57）…… 経30本

14）板谷徹　翻刻「冠船躍方日記」『尚育王代における琉球芸能の環境と芸能復元の研究』沖縄県立芸術大学音楽学部板谷研究室2003年
※「冠船躍方日記」は那覇市蔵の琉球国王尚家関係資料（文書番号81）である

15）「冨川親方八重山嶋御用布座公事帳」の「御用布疋反長幅定之事」及び「毎年御用定之事」に記されていた布の幅
一尺三寸（白木綿布・他）
一尺三寸五分（白木綿布）
一尺四寸（白木綿布）
一尺六寸（縮布）
一尺七寸（あやさひ）

16）現在、一反は和服一着分を示し、一疋は二反分を意味している。
王国時代、一反はひとまとまりの織り上がりを意味する広義のものであり、長さは布の粗密や模様の有無によって異なっていた。
「宮古島規模帳」「宮古島仕上世座例帳」「八重山島船手座例帳」などから、織物の丈尺を田中俊雄（P145－156『沖縄織物の研究』紫紅社　1976年）が下記のとおりまとめており、長さが一定していなかったことがわかる。
上布　十一尋・八尋・七尋
中布　十一尋・八尋・七尋半
下布　十二尋・七尋・六尋
●疋については「宮古嶋御用布座公事帳」（P311『沖縄県史料　前近代７　首里王府仕置３』沖縄県教育委員会　1991年）に「細上布より有之疋之時ハ、拾七升ニ限長拾壱尋はゝ壱尺七寸之事」（御用布長幅定之事）、「冨川親方八重山嶋御用布座公事帳」（P75『沖縄県史料　前近代７　首里王府仕置３』沖縄県教育委員会　1991年）に「あやさひ壱疋より有之時ハ弐拾升紺島拾壱尋幅壱尺七寸ニ限候事」（御用布疋反長幅定之事）とあり、王国時代末（19世紀末）には「壱疋」＝「拾壱尋（五丈五尺）」と捉えられていたと考えられる。それから類推するに18世紀においても、拾壱尋ではないかと判断した。

17）『絵手本』（享保三年戊戌五月吉日と記銘される）
※沖縄県宮古郡多良間村に重要無形民俗文化財「多良間の豊年祭」の衣裳や小道具のための図案集として仲筋集落に残る。

18）P34-36「第２節　染織関係　びんがた」『沖縄県文化財調査報告書第87集　沖縄県の諸職-県内諸職関係民俗文化財調査-』沖縄県教育委員会1988年
※城間榮喜氏からの聞き取り、内容は下記のとおり
「下絵は幕も風呂敷も生地をつなぎ合わせて木炭で描き」
「幕は２幅にほどいて棒の入る程度の耳を作り（布幅が足りないときは木綿を継ぎ足して耳を作る）、そこに棒を差し込み、棒に紐を結わえて柱などに二カ所引っ張る。」
「幕と風呂敷の地染めは琉球藍とフクギとであるが、地染めの大半は藍染めである。」「風呂敷・幕とも藍甕に入れて染める方法をとっている。」
「地染めが終わると、全体に軽く明礬水を刷毛で引いて色止めする」

19) ●芹澤銈介「「かたちき」と「ぬいひち」」『工藝　100号』日本民藝協會　1939年
「消灰であたつた下絵－略－」
「幕などの大きなものは二つ三つの四角に分けて張るが、細く流れに張る事はしない、－略－両面の糊引き終えて豆汁を引き、染めとなる。」
「藍染めのみなれば藍甕におろして染む。巾廣きものは幾重にも折りたゝみ甕の中にて手にてくる。染上げたらば、洗濯して仕上げる。」
●芹澤銈介『琉球の形附』日本民藝協会1943年
「藍染の事　－略－　下豆汁は枯す程よく染附き、色合いによって、白豆汁、黒豆汁、群青下を引く」

20) 当館の博物館職員ゼミナールで「久米島に残る御拝領上布幕について」（2013年９月30日）に発表した際、藤田祐樹（人類担当）から鶴文のパターン化についてのヒントを得た。

21) ●国分直一、恵良宏『南島雑話２』平凡社　1984年
●名嘉真宜勝・恵原義盛『沖縄・奄美の葬送・墓制』明玄書房　昭和54年
●『沖縄の民俗資料』琉球政府文化財保護委員会　1970年
●平敷令次『沖縄の祖先祭祀』第一書房　1995年
●宮城文『八重山生活誌』1972年
●『郷土』７・８・10号　沖縄大学沖縄学生文化協会
●『ひんぷん』第２号　琉球大学民俗研究クラブ
●『沖縄民俗』第７・８・９・10・11・12・14号　琉球大学民俗研究クラブ
●『民俗』第４・５号　琉球大学民俗研究クラブ

別表 1 - 1）　喜久村家所蔵の幕調査データ①

項目	御拝領上布銘入紅型幕①	御拝領上布銘入紅型幕②
素材	経（苧麻）、緯（苧麻）	経（苧麻）、緯（苧麻）
密度	経（18～16）× 緯（13～12）	経（18～16）× 緯（13～12）
布巾	47cm	46cm
寸法	縦188.0，横369.0cm 反物の長さ：約1,521.6cm ※（188＋縫い代：上1.1＋縫い代下：1.1）× 8	縦189.5，横364.0cm 反物の長さ：約1,532cm ※（189.5＋縫い代：上１＋縫い代下：１）× 8
仕立	8 枚接ぎ	8 枚接ぎ
縫製	並縫い（ぐしぬい） 縦に 8 枚を縫い繋ぎ、上部と裾を三つ折り並縫い。紐通しは、布を二枚合わせにし、 9 ヶ所取付。現在は 4 ヶ所のみ残る（図 1 ）。 縦の縫い代 5 ㎜、上部と裾の縫い代は各1.1cm	並縫い（ぐしぬい） 縫い糸：苧麻の 2 本撚り合わせ。 縦に 8 枚を縫い繋ぎ、上部と裾を三つ折り並縫い。紐通しは、布二枚合わせにし、 9 ヶ所取付（図 2 ）。 縦の縫い代 7 ～ 4 ㎜、上部と裾の縫い代は各 1 ㎝ か
模様及び構成	〔構成〕 熨斗目（二本線）・鶴（ 4 羽）・波頭（ 8 件）・飛沫・波の渦（11） 〔鶴文様〕 （右から）右向き・左向き・左向き・右向き （右から）口閉じ・口開き・口閉じ・口開き 鶴の大きさ：右から（単位はcm） 1 ：縦54.5，横37.0 2 ：縦52.0，横37.0 3 ：縦54.5，横37.0 4 ：縦54.0，横37.0 〔銘文〕 乾隆二十二年蝶丑拝領之上布公孫氏	〔構成〕 熨斗目（二本線）・鶴（ 4 羽）・波頭（ 8 件）・飛沫・波の渦（12） 〔鶴文様〕 （右から）右向き・左向き・左向き・右向き （右から）口開き・口閉じ・口開き・口閉じ 鶴の大きさ：右から（単位はcm） 1 ：縦54.5，横37.5 2 ：縦53.0，横37.0 3 ：縦54.5，横37.0 4 ：縦54.0，横37.0 〔銘文〕 乾隆二十二年蝶丑（拝）領之上布公孫氏 ※「拝」の字は一画が欠
染色技法・工程	型染：鶴（染地型：型紙 2 枚） 筒描き：熨斗目・波頭・飛沫・波の渦・銘 1　布を接ぎ合わせ下絵を墨で描く（筒描き部分） 2　布を 2 枚ずつに解く。 3　鶴文様を型置きする（片面のみ）。 4　波文、熨斗目文は型置きを終えた最初の 2 枚を張りながら糊で筒描きし、最初の 1 枚を解き、 2 枚目と 3 枚目を接ぎ合わせ筒描きする。この工程を繰り返し、糊置きを終えた時には 1 枚づつに解いた状態にする。 ※左から 2 枚目と 3 枚目は接ぎ合わせずに下絵と筒描きが施されている。 5　1 枚ずつ解かれた布に、呉引き・色差し・隈取りを行う。 6　表のみ糊伏せする（色差しした文様と熨斗目文の内側のみ） 7　地染め（藍染：浸染か） 8　水元 9　縦を接ぎ合わせ、上下を縫い、最後に紐通しを付ける。	型染：鶴（染地型：型紙 2 枚） 筒描：熨斗目・波頭・飛沫・波の渦・銘 1　布を接ぎ合わせ下絵を墨で描く（筒描き部分） 2　布を 2 枚ずつに解く。 3　鶴文様を型置きする（片面のみ）。 4　波文、熨斗目文は型置きを終えた最初の 2 枚を張りながら下絵を墨で描き、糊で筒描きし、最初の 1 枚を解き、 2 枚目と 3 枚目を接ぎ合わせ筒描きする。この工程を繰り返し、糊置きを終えた時には 1 枚づつに解いた状態にする。 5　1 枚づつ解かれた布に、呉引き・色差し・隈取りを行う。 6　表のみ糊伏せする（色差しした文様と熨斗目文の内側のみ） ※熨斗目文は工程 3 の接ぎ合わせた時に糊伏せまで行った部分と解いて糊伏せた部分がある。 7　地染め（藍染：浸染か） 8　水元 9　縦を接ぎ合わせ、上下を縫い、最後に紐通しを付ける。
色（ガイド採取）	〔地色〕鉄紺 (N-898) 〔差色〕水色：露草色 (N-887) と空色 (N-877) の間か 灰色：素鼠色 (N-954) 墨色：墨色 (N-960) 赤系：猩々緋 (N-724) コルク色 (N-741) 小豆色 (N-729) 朽葉色 (N-775)	〔地色〕鉄紺 (N-898) 〔差色〕水色：露草色 (N-887) と空色 (N-877) の間か 灰色：素鼠色 (N-954) 墨色：墨色 (N-960) 赤系：猩々緋 (N-724) コルク色 (N-741) 煉瓦色 (N-752) 小豆色 (N-729) 朽葉色 (N-775)
状態	左端に多きな穴がある他、状態に大きな損傷はみられない。 紐通しは 4 カ所のみ残る（図 1 ） 左から 1 枚目と 2 枚目の接ぎ合わせの上部に黒い木綿糸で縫い直しの跡あり（32cm）。 右から 2 枚目と 3 枚目の接ぎ合わせ上部に芭蕉糸で解けた所を縫って補強した跡あり（26.5cm）	銘部分に大きな穴がみられ、その他にも小さな穴が多数みられる。 上布幕①と比較すると使用によると思われる色の摺れが多くみられ、退色している。 紐通しは 9 カ所残っているが、右から 4 番目以降の 4 カ所にはほころびがみられる。

別表１－２）　喜久村家所蔵の幕調査データ②

項目	鶴に波文藍型幕	椿梅笹輪宝文紅型幕
素材	経（苧麻）、緯（苧麻）	経（苧麻）、緯（苧麻）
密度	経（14～15）× 緯（10～11）	経（15～16）× 緯（11）
布巾	51～52㎝	49.5㎝
寸法	縦182.0，横303㎝ 反物の長さ：約1,104㎝ ※（182＋縫い代：上１＋縫い代下：１）× ６	縦105.0，横241.5㎝ 反物の長さ：約535㎝ ※（105＋縫い代：上１＋縫い代下：１）× ５
仕立	６枚接ぎ ※内１枚（左端）は縦の中心をつまみ縫いし表からは半幅の二枚に見せかけており、表からは７枚接ぎにみえる。	５枚接ぎ
縫製	並縫い（ぐしぬい） 縫い糸：苧麻の染めていない糸 上部と裾を三つ折り並縫いする。染色が全て終了した後に縦を接ぎ合わせる。紐通しは２箇所に残る（図３）。	並縫い（ぐしぬい） 縫い糸：藍染の木綿糸　左端１枚目と２枚目には別糸（黒い細めの木綿糸）が使われている。左端１枚目と２枚目の絹布の縫い合わせには白い糸が使われている。 裾を三つ折り並み縫いする。上部は絹布が被さっているため、三つ折り並み縫いされているかどうか不明。染色終了後に縦を接ぎ合わせている。 その後、上部に長さ20㎝程の絹布を被せるように縫いつける。 その上から木綿白布と苧麻紺布で二重に仕立てられた紐通しが５ヶ所に縫いつけられている。右端の紐通しは欠／図４） 左端１枚目は、縫い糸が他と異なり、また、縦を縫い合わせ、その後に裾を三つ折り並み縫いしている。絹布がここだけ解かれ縫い合わされており、輪宝文も左端のみ極端にずれている。（写真４－１／図４）
模様及び構成	〔構成〕 熨斗目（二本線）･鶴（３羽）･波頭（７件）･飛沫･波の渦（26） 〔鶴文様〕単位は㎝ （右から）左向き・左向き（脚は正面向き）・右向き ※口は三羽とも閉じている 鶴の大きさ：右から １：縦38.5，横70.0 ２：縦53.0，横90.0 ３：縦47.0，横67.0 〔銘文〕なし	〔構成〕 椿・梅・雪持笹・輪宝文 〔椿梅笹文様〕単位は㎝ 文様の向きは全て同じ・単独模様 文様の大きさ：縦 44.2，横 34.0 〔輪宝文〕単位は㎝ 文様の大きさ：縦 33.0，横（不明） 連続模様：布の横方向に型置きか？ 〔銘文〕なし
染色技法・工程	筒描：熨斗目・鶴・波・波頭・飛沫・波の渦 １　布の上と裾を縫う。 ２　布を接ぎ合わせ下絵（薄い灰色が残っている）を描く。 ３　布を２枚ずつに解く。 ４　鶴文を筒描きする。 ５　波文、熨斗目文は鶴文の筒描きを終えた最初の２枚を張りながら、糊で筒描きし、最初の１枚目を解き、２枚目と３枚目を接ぎ合わせ筒描きをする。この工程を繰り返し、糊置きを終えた時には１枚づつに解いた状態にする。 ６　１枚ずつ解かれた布に、呉引き･色差し（藍の引き染め） ７　表のみ糊伏せする（水色の部分と熨斗目文の内側のみ） ８　地染め（藍染：浸染か） ９　水元 10　縦を接ぎ合わせ、最後に紐通しを付ける。	型染：①椿梅笹文（白地型）　②輪宝文（染地型） １　布の上と裾を縫う ２「椿梅笹文」を型置きする（片面のみ） ３　布を縫い合わせず、並べて「輪宝文」を型置きする（片面のみ）。最初の１枚目を除き次の布を２枚目に並べて型置きする。それを繰り返す。 ４　１枚ずつ解かれた布に、呉引き・色差し・隈取りを行う。 ５　表と裏の一部（赤系統の色差し部分）を糊伏せする。 ６　地染め（墨で引き染めする。その後、藍の浸染めか） ７　縦を接ぎ合わせ、上部に絹布を被せる。最後に紐通しを付ける。
色（ガイド採取）	〔地色〕898鉄紺 〔差色〕水色：886花浅葱か	〔地色〕898鉄紺960墨色の間か 〔差色〕灰色：901藍鼠か 赤系：724猩々緋 731朱色 741コルク色か750山吹茶 729小豆色
状態	上部：２ヶ所、中部：４ヶ所、下部：２ヶ所の大きな破損の穴がある。	左１枚目は縫い直しの跡あり

別表 2）紅型幕の布幅及び織密度について

No.	資料名	織密度	布　幅	備　考
1	苧麻紺地松竹梅波文様紅型舞台幕	経 16，緯 9	37cm	仲筋公民館（多良間島） 昭和 6 年
2	苧麻紺地鶴亀松竹梅文様紅型舞台幕	経 12，緯 11	50cm	石垣市立八重山博物館 昭和初期
3	苧麻紺地松竹梅鶴亀文様紅型舞台幕	未計測	42cm	喜宝院蒐集館（竹富島） 明治後期
4	苧麻紺地松竹梅鶴亀文様紅型舞台幕	経 15，緯 7	未計測	古見公民館（西表島） 大正 15 年
5	苧麻紺地松竹梅鶴亀文様紅型舞台幕	経 14，緯 8	48cm	干立公民館（西表島） 昭和初期
6	苧麻紺地松竹梅鶴亀文様紅型舞台幕	経 12，緯 7	53cm	干立公民館（西表島） 大正後期
7	苧麻紺地丸文松竹梅文様紅型舞台幕	経 12，緯 7	未計測	南部落（小浜島）
8	苧麻紺地松竹梅鶴亀文様紅型舞台幕	経 15，緯 11	未計測	北部落（小浜島）
9	苧麻紺地松竹梅鶴亀文様紅型舞台幕	経 12，緯 10	未計測	南部落（小浜島）
10	紺地獅子牡丹模様紅型幕（小）	経 14，緯 14	50.5cm	沖縄県立博物館・美術館（No.349）
11	紺地鶴亀松竹梅模様紅型幕（中）	経 10，緯 10	42.5cm	沖縄県立博物館・美術館（No.403）
12	紺地鶴亀松竹梅模様紅型幕（中）	経 10，緯 9	39.5cm	沖縄県立博物館・美術館（No.406）
13	苧麻紺地鶴竹文様紅型裂（幕の一部）	経 12，緯 10	計測不可	沖縄県立博物館・美術館（No.15910）

No. 1 ～ 9 は下記報告書を参照した

p172,175-178　沖縄県史料調査シリーズ第 1 集・沖縄県文化財調査報告書第 126 集『沖縄の染織（Ⅰ）染織品編』沖縄県教育委員会 1997 年

1　御拝領上布銘入紅型幕①

写真 1-1）御拝領上布幕①（全体）

写真 1-2）鶴部分（左端）

写真 1-3）鶴彩色部分

写真 1-4）使用色

写真 1-5）波部分（中央）

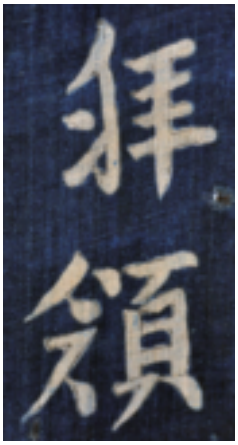


写真 1-6）銘部分

写真 1-7）拡大

2　御拝領上布銘入紅型幕②

写真 2-1）御拝領上布幕②（全体）

写真 2-2）鶴部分（左二番目）

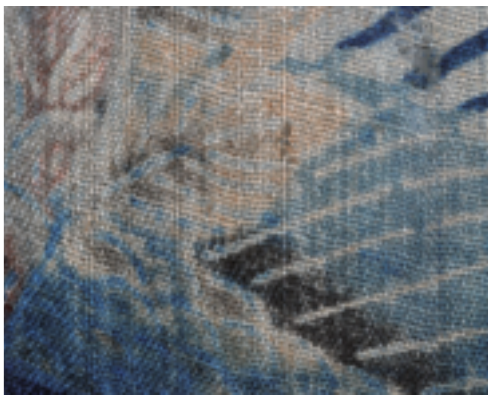


写真 2-3）鶴彩色部分

写真 2-4）使用色

写真 2-5）波部分（左四番目）

写真 2-6）銘部分

写真 2-7）拡大

3　鶴に波文藍型幕

写真 3-1）鶴に波文幕（全体）

写真 3-2）鶴部分（左端）

写真 3-3）鶴部分（中央）

写真 3-4）波部分（中央）

写真 3-5）使用色

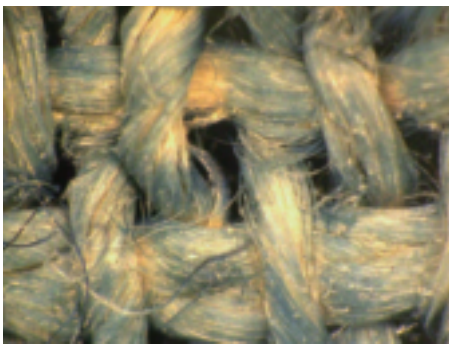


写真 3-6）拡大 100 倍

4　椿梅笹輪宝文紅型幕

写真 4-1）椿輪宝文幕（全体）

写真 4-2）椿文部分（右二番目）

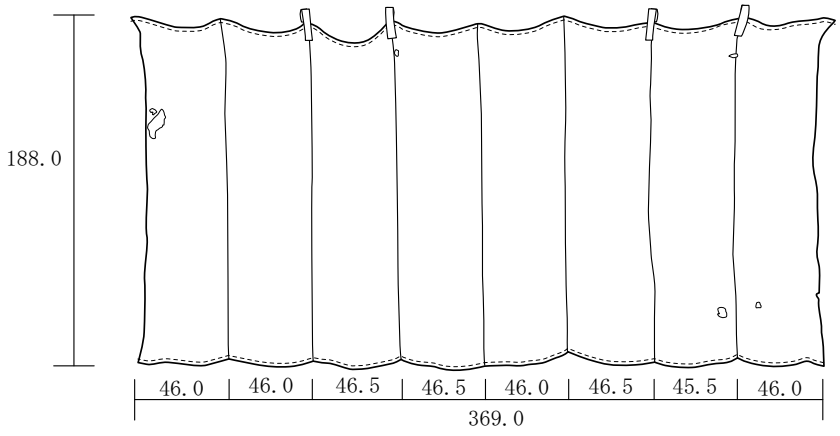
写真 4-3）梅文部分（隈取り部分）

写真 4-4）使用色

写真 4-5）輪宝文部分（中央）

写真 4-6）拡大 100 倍

図 1）御拝領上布銘入紅型幕①　　単位：cm



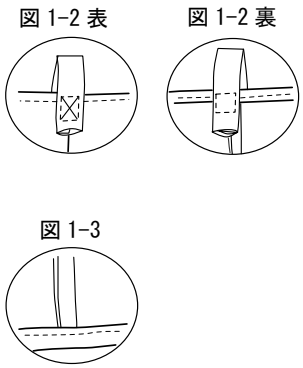
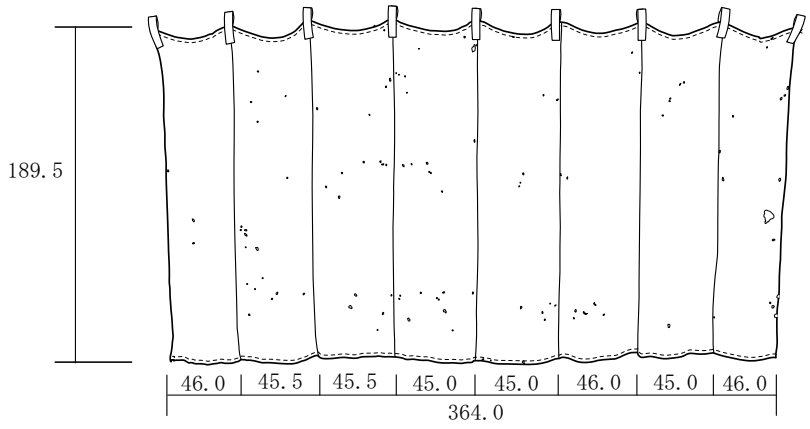


図 2）御拝領上布銘入紅型幕②



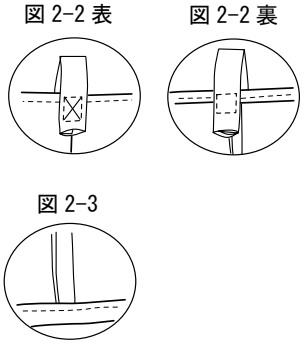
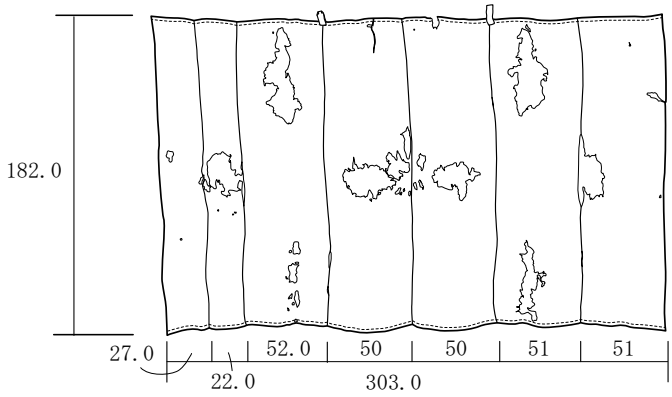


図 3）鶴に波文藍型幕



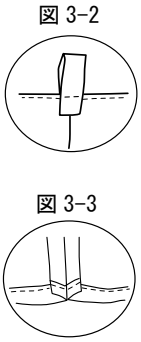
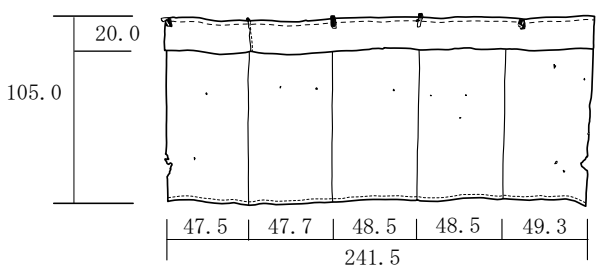
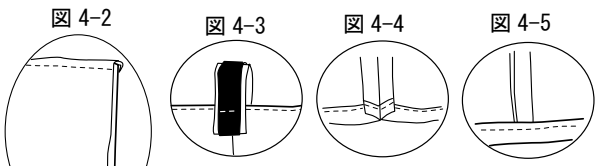



図 4）椿梅笹輪宝文紅型幕